

中国におけるHighly Sensitive Personの状況調査 ： 感覚処理感受性と人生の意味および幸福感の関係

その他のタイトル	A Survey of the Situation of Highly Sensitive Persons in China : The relationship between sensory processing sensitivity, life meaning and well-being
著者	李 佳奇, 串崎 真志
雑誌名	関西大学心理学研究
巻	12
ページ	7-15
発行年	2021-03
URL	http://doi.org/10.32286/00022970

中国におけるHighly Sensitive Personの状況調査

— 感覚処理感受性と人生の意味および幸福感の関係 —

李 佳 奇 関西大学大学院心理学研究科

串 崎 真 志 関西大学文学部

A Survey of the Situation of Highly Sensitive Persons in China The relationship between sensory processing sensitivity, life meaning and well-being

Jiaqi LI (Graduate School of Psychology, Kansai University)

Masashi KUSHIZAKI (Faculty of Letters, Kansai University)

This study aimed to examine the present situation of highly sensitive person in China, and to clarify the relationship between sensory-processing sensitivity, meaning in life and well-being. Results showed that the characteristics of highly sensitive person in China are similar to those in other cultures, and that middle age is a difficult time for them. After controlling for age, gender, income, marital status and children's status, the overall results showed that low sensory threshold and ease of excitation were negatively correlated with measures related to presence of meaning in life and well-being, and aesthetic sensitivity was positively correlated with meaning in life and well-being. The results suggest that sensory processing sensitivity has two different aspects, and that if the ability of aesthetic sensitivity is used well, one can feel more meaningfulness and happiness in life.

Keywords: Highly Sensitive Person, sensory-processing sensitivity, meaning in life, well-being

目 的

Highly Sensitive Person (以下, HSP) は生得的な特性として, 外部からのさまざまな刺激が, 他の人より敏感であるという, 感覚処理感受性 (sensory-processing sensitivity: 以下, SPS) の高い人たちを指す。彼らは環境の小さな変化に気づきやすく (sensory sensitivity), 疲れやすく (overarousal), 感情の振れ幅が大きく (emotional intensity), 物事を深く考える (depth of processing) という4つの特徴をもつ (Aron, Aron, & Jagiellowicz, 2012)。全人口の15から20%程度が相当すると報告されてい

る (Aron & Aron, 1997)。

SPSが高い人は, 他の人の気持ちに対して繊細で, まわりのストレスフルなエネルギーを, 否が応でも自分に取り込んでしまうために, かなり気疲れするという (Orloff, 2017)。また, 対人感受性が高いため, 対人不安にもなりやすい (Konrad & Herzberg, 2017)。彼らは, ストレッサーを苦痛と感じやすいため, 抑うつや不安を感じやすく (Liss, Timmel, Baxley, & Killingsworth, 2005), 自己効力感と疎外感が低く, ストレスを生じやすく (Evers, Rasche, & Schabracq, 2008), ネガティブ気分になりやすい傾向がある (Aron, Aron, & Davies, 2005)。そして,

SPSが高いほど、自己否定的になりやすく、生きづらさを感じ(保坂, 2018)、幸福感(well-being)も低い(Karin, & John, 2015)。SPSが高い群は低群や中群と比較して、主観的幸福感(subjective well-being)、人生に対する満足度と自尊心が低いことが報告されている(上野・高橋・小塩, 2020)。

SPSは刺激の処理で手一杯になりやすい「易興奮性(ease of excitation)」、小さな刺激に反応しやすい「低感覚閾(low sensory threshold)」精神生活の豊かさを意味する「美的感受性(aesthetic sensitivity)」という、3つの下位概念から構成される(Sobocko & Zelenski, 2015; 高橋, 2016)。Yano & Oishi (2018)の研究によれば、「低感覚閾」と「易興奮性」は抑うつとの間に正の相関、「美的感受性」は負の相関がある。このようにSPSは、下位因子によって異なる心理的な機能を持つことが示唆される(Sobocko & Zelenski, 2015; 高橋, 2016; 上野・高橋・小塩, 2020)。

さらに、串崎(2019)によると、SPSが高い人は情動吸収(emotional sponges)、気疲れ(emotional hangovers)、情動直感(emotional intuition)の3つの特徴をもつ。そして、情動直感が人生の意味に関連し、情動吸収や気疲れといったネガティブな情動を制御するという、HSPの適応的利点を示唆している。すなわち、SPSには短所と利点という二面性があると考えられる。

一方、人生の意味(meaning in life)は幸福感と高い相関がある(Shek, 1992)。人生の意味を持つ人々は、より多くの幸福感を経験し、将来についてより楽観的になり(Yalçın, & Malkoç, 2015)、生活に対して、より満足する傾向がある(Nell, 2014)。Miao, Zheng, & Gan (2017)の研究によれば、人生の意味が、将来の生活に対するストレスに対処する上で重要な役割を果たし、ポジティブな感情を通じて、ポジティブな対処スタイルを引き起こすという。反対に、人生の意味感が低いほど、抑うつと不安の傾向が高く(Bamonti, Lombardi, Duberstein, King, & van Orden, 2016)、自殺のリスクが高い(Heisel, & Flett, 2016)。したがって、人生の意味は、ストレスが感情や幸福感に及ぼす悪影響を低減できると考えられる。

SPSが高いほど、日常的に自分の気持ちを抑え、ストレスを溜め、人生に虚無感を感じやすい反面、深く考える傾向があるため、人生の意味を積極的に探すと考えられる。そして、美的感受性はHSPの人

にとっての能力であり、利点である。この能力をうまく活用することで、HSPでない人に比べて、人生の楽しさを味わうことができるだろう。

日本の調査(李, 印刷中)によれば、20代の対象者において、「低感覚閾」・「易興奮性」は、人生の意味を積極的に探すことである「意味探求」(Search for Meaning in Life)に正の相関があった。また、30代以上の対象者において、「低感覚閾」・「易興奮性」は、人生の意味を感じるかどうかである「意味保有」(Presence of Meaning in Life)に負の相関、幸福感に関連する尺度にも負の相関があった。そして、いずれの年齢層でも、「美的感受性」は人生の意味と幸福感に正の相関があった。

ところで、SPSの特性は、年齢にしたがって変化することが示唆されている。例えばUeno, Takahashi, Oshiro (2019)は、年齢が高いほど、「低感覚閾」と「易興奮性」が低く、「美的感受性」が高いと報告している。Erikson (1980 小此木訳 1982)は、人生の発達時期には「発達課題(development task)」があり、人々は「発達課題」を解決しつつ成長すると提唱している。はたしてHSPと人生の意味・幸福感の関係は、人生の発達時期によって、どのように変化するのだろうか。日本の調査(李, 印刷中)によると、これら相関は、40代以降の中年期に強くなる。この傾向には文化的な相違があるのだろうか。これを確認するため、他の文化圏で調査する必要がある。HSPに関する研究は、世界人口一位の中国における報告はほとんどない。そこで本研究では、中国人を対象者として、中国におけるHSPの現状を調査し、SPSと人生の意味・幸福感の関係を明らかにすることを目的とする。

方法

参加者

503名(男性217名, 女性286名, 20代以下: 4.00%, 20代: 29.62%, 30代: 24.05%, 40代: 8.34%, 50代: 29.42%, 60歳以上: 4.57%)の中国人が参加した。実施時期は2020年7月であった。

手続き

「問巻星」で調査票を作成し、インターネット上に開設した。調査の際には、調査票の最初に同意書を附し、同意書には研究目的、調査方法、倫理的配慮について説明した。調査協力者は、参加の依頼文を

読み、「本研究の内容を理解し、参加する」の欄にチェックをし、これをもって同意を得たと判断した。調査の途中で不快感または負担を感じられることがあれば、原因を問わずに何時でも回答を中止できることを明記した。調査は同意を得られた参加者に対して実施した。なお本研究は、著者の所属する部署の倫理審査を受け、承認を得た。

質問紙

①社会人口統計学的要因として、年齢、性別、収入、婚姻状態、子供の有無について回答した。

②感覚処理感受性 (Highly Sensitive Person Scale: HSPS, Aron & Aron, 1997)。27 項目について、「非常によくあてはまる」を 7 点、「全くあてはまらない」を 1 点の 7 件法で回答を求めた。中国で調査するため、バックトランスレーションを行った。まず、著者が原尺度の項目を中国語に翻訳した。その中国語訳を踏まえて、心理学を専門とする大学教員 1 名および大学院生 2 名 (中国留学生) が翻訳の内容を協議し、中国語訳を修正した。そして、翻訳会社にバックトランスレーションを依頼した。その後、再び先ほどの 3 名で、項目内容が原版と等しいかどうかを検討した。その結果、原版とほとんど等質であると判断され、中国語版 HSPS とした。

③人生の意味 (Meaning in Life Questionnaire: MLQ の中国語版, 刘, 甘, 2010)。「意味保有」5 項目と「意味探求」5 項目の 2 因子で構成され、「非常によくあてはまる」を 7 点、「全くあてはまらない」を 1 点の 7 件法で回答を求めた。本研究における α 係数は .81, .85 であった。

④主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS の中国語版, Chien, et al., 2020)。4 項目の 1 因子で構成され、「非常によくあてはまる」を 7 点、「全くあてはまらない」を 1 点の 7 件法で回答を求めた。本研究における α 係数は .77 であった。

⑤人生に対する満足度尺度 (the Satisfaction With Life Scale: SWLS の中国語版, Andrew, 2019)。5 項目の 1 因子で構成され、「非常によくあてはまる」を 7 点、「全くあてはまらない」を 1 点の 7 件法で回答を求めた。本研究における α 係数は .84 であった。

なお、本研究のデータ分析には、IBM-SPSS Statistics 25 と IBM Amos 25 を使用した。

結果

因子構造の検討

まず、HSP 尺度の因子構造を検討するため、主因子法でプロマックス回転による探索的因子分析を試みた。固有値の推移は、第 1 因子から順に 7.487, 2.579, 1.486, 1.191, 1.128 であり、固有値 1 以上の因子が 5 つ認められたが、スクリー基準からは 3 因子構造と考えられた。そこで 3 因子を中心に、抽出する因子数を変えながら結果を比較検討したところ、より単純構造に近く、また解釈もしやすい 3 因子を抽出した。さらに、因子負荷量が .35 に達しない項目、全ての因子に因子負荷量が高い項目を分析から外し、再び 3 因子を指定した因子分析 (主因子法, プロマックス回転) を行った結果、3 因子はそれぞれ 6 項目となった。

次に、確認的因子分析を行った。その結果、各項目の標準化推定値は .416 から .815 (すべて有意)、適合度指標は、 $\chi^2=344.386$, $df=132$, $p<.001$, GFI=.928, AGFI=.906, CFI=.911, REMSA=.057, AIC=422.386 であった。第 1 因子は、「一度にたくさんの事が起こっていると不快になる」「大きな音で不快になる」などの項目から構成され、「易興奮性・低感覚閾」と命名した。第 2 因子は、「痛みに敏感」などの項目から構成され、「感受性」と命名した。第 3 因子は、「芸術や音楽に深く感動する」などの項目から構成され、「美的感受性」と命名した (Table 1)。先行研究 (Smolewska, McCabe, & Woody, 2006; 高橋, 2016) の結果と比較すると、因子を構成する項目に違いがあったものの、これまでの HSP の 3 因子構造と類似の構造となった。全体の信頼性係数は $\alpha=.83$ であった。各下位尺度の信頼性係数は、「易興奮性・低感覚閾」 $\alpha=.76$ 、「感受性」 $\alpha=.83$ 、「美的感受性」 $\alpha=.67$ であった (Table 1)¹⁾。

そして、HSP 総得点の度数分布 ($N=503$) を確認したところ、94 点以上が上位 30% に相当し、96 点以上が上位 25% に相当し、99 点以上が上位 20% に相当し、105 点以上が上位 10% に相当することがわかった。

性差

HSP 尺度の男女差について検討した (Table 2)。易興奮性・低感覚閾については、男性 ($M=28.04$,

Table 1 HSP 尺度の因子分析—主因子法, プロマックス回転

項目	M	SD	因子1	因子2	因子3
易興奮性・低感覚閾 $\alpha = .76$					
23 一度にたくさんの事が起こっていると不快になりますか?	4.95	1.60	.838	-.032	-.023
19 いろいろなことが自分の周りで起きると、不快な気分が高まりますか?	4.72	1.58	.708	.032	-.012
16 一度にたくさんを頼まれるとイライラしますか?	4.89	1.62	.661	.094	-.049
25 大きな音や雑然とした光景のような強い刺激がわずらわしいですか?	4.90	1.61	.626	.012	.080
9 大きな音で不快になりますか?	5.48	1.59	.490	.007	.148
21 生活に変化があると混乱しますか?	4.40	1.70	.433	.274	-.138
敏感性 $\alpha = .83$					
4 痛みに敏感になることがありますか?	3.51	1.93	-.024	.711	.022
3 他人の気分に左右されますか?	4.72	1.61	.021	.705	.021
5 忙しい日々が続くと、ベッドや暗くした部屋などプライベートが得られ、刺激の少ない場所に逃げ込みたくなりますか?	4.01	2.02	-.016	.648	-.045
1 強い刺激に圧倒されやすいですか?	4.00	1.73	.102	.501	-.069
8 豊かな内面生活を送っていますか?	4.84	1.61	.022	.497	.115
6 カフェインの影響を受けやすいですか?	3.45	1.88	.057	.403	.061
美的感受性 $\alpha = .67$					
22 微細で繊細な香り・味・音・芸術作品などを好みますか?	5.50	1.32	-.090	.036	.676
10 美術や音楽に深く感動しますか?	5.64	1.39	-.070	.045	.565
12 自分に対して誠実ですか?	5.47	1.30	-.117	.033	.507
24 動揺するような状況避けることを優先して普段生活していますか?	5.36	1.33	.224	-.125	.452
17 間違えたり物を忘れたりしないようにいつも気をつけていますか?	5.62	1.33	.186	-.034	.425
15 物理的な環境で不快な感じがする人がいる場合、どうすれば快適にできるかわかりますか? (例えば、明るさや席を変える)	5.05	1.46	.101	.085	.377
		α 係数	.76	.83	.67
		因子相関			
		因子2	.651		
		因子3	.196	.140	

Table 2 HSP 尺度の性差 (N=503)

	男性n=217		女性n=286		t値
	M	SD	M	SD	
易興奮性・低感覚閾	28.04	7.78	30.33	6.36	-3.54 ***
敏感性	24.83	7.35	25.93	6.94	-1.71
美的感受性	32.92	5.32	32.40	4.77	1.14
HSP総得点	85.79	15.83	88.66	13.48	-2.15 *

* $p < .05$, *** $p < .001$

SD=7.78)と女性(M=30.33, SD=6.36)で有意差があった($t(410.845) = -3.54, p < .001$)。敏感性については、男性(M=24.83, SD=7.35)と女性(M=25.93, SD=6.94)で有意差はみられなかった($t(501) = -1.71, p = .089$)。美的感受性についても、男性(M=32.91, SD=5.32)と女性(M=32.40, SD=4.77)で有意差はみられなかった($t(501) = 1.14, p = .255$)。総得点については、男性(M=85.79, SD=15.83)と女性(M=88.66, SD=13.48)で有意差があり、女性の方が高かった($t(422.106) = -2.15, p = .032$)。総体的に女性は男性より有意に高いという結果は、先行研究(Aron & Aron, 1997; Benham, 2006; 高橋, 2016)に一致していた。

HSP 尺度と各尺度の相関

次に、収入を統制したうえで、年齢別・性別ごとに偏相関係数を算出した。年齢はErikson (1980 小此木 1982)の発達段階理論を基準に、青年期(20

代以下、男性8名、女性12名)、成人期(20代・30代、男性103名、女性167名)、中年期(40代・50代、男性93名、女性97名)、老年期(60代以上、男性13名、女性10名)の4群に分けた。青年期と老年期は人数が少なかつたため、本研究では成人期と中年期の結果を示した(Table 3 ~ Table 6)。

成人期の男性においては、易興奮性・低感覚閾と敏感性は、意味保有と主観的幸福感尺度に負の相関があった。美的感受性はすべて尺度に有意な正の相関がみられた。女性においては、易興奮性・低感覚閾は意味探求以外の全ての尺度に負の相関があった。敏感性は意味保有と主観的幸福感尺度に負の相関があり、意味探求に正の相関がみられた。美的感受性は主観的幸福感尺度以外の各尺度に正の相関があった(Table 3, Table 4)。

中年期の男性においては、易興奮性・低感覚閾は主観的幸福感尺度だけに負の相関がみられた。敏感性は意味保有と主観的幸福感尺度に負の相関があり、

Table 3 各尺度の偏相関係数（成人期男性 n=103）

	1	2	3	4	5	6
1. 易興奮性・低感覚閾						
2. 敏感性	.666 ***					
3. 美的感受性	.149	.150				
4. 意味保有	-.318 **	-.287 **	.509 ***			
5. 意味探求	-.020	.099	.336 **	.233 *		
6. SWLS	-.086	-.042	.455 ***	.498 ***	.211 *	
7. SHS	-.238 *	-.360 ***	.468 ***	.634 ***	.177 ***	.581 ***

注. 制御変数：収入。
* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 4 各尺度の偏相関係数（成人期女性 n=167）

	1	2	3	4	5	6
1. 易興奮性・低感覚閾						
2. 敏感性	.467 ***					
3. 美的感受性	.145	.199 *				
4. 意味保有	-.238 **	-.197 **	.354 ***			
5. 意味探求	.115	.292 ***	.274 ***	.018		
6. SWLS	-.326 ***	-.122	.189 *	.569 ***	-.036	
7. SHS	-.405 ***	-.338 ***	.143	.437 ***	.006	.458 ***

注. 制御変数：収入。
* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 5 各尺度の偏相関係数（中年期男性 n=93）

	1	2	3	4	5	6
1. 易興奮性・低感覚閾						
2. 敏感性	.615 ***					
3. 美的感受性	.264 *	.292 **				
4. 意味保有	-.139	-.207 *	.122			
5. 意味探求	.161	.174	.221 *	.108		
6. SWLS	-.146	.039	.227 *	.424 ***	.261 *	
7. SHS	-.440 ***	-.396 ***	.307 **	.411 ***	.096	.415 ***

注. 制御変数：収入。
* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 6 各尺度の偏相関係数（中年期女性 n=97）

	1	2	3	4	5	6
1. 易興奮性・低感覚閾						
2. 敏感性	.632 ***					
3. 美的感受性	.398 ***	.252 *				
4. 意味保有	.027	-.204 *	.280 **			
5. 意味探求	.040	-.188	.280 *	.372 ***		
6. SWLS	-.205 *	-.349 ***	.110	.389 ***	.354 ***	
7. SHS	-.230 *	-.307 **	.124	.531 ***	.190	.570 ***

注. 制御変数：収入。
* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

美的感受性は意味保有以外の各尺度に正の相関が示された。女性においては、易興奮性・低感覚閾は人生に対する満足度尺度と主観的幸福感尺度に負の相関があり、敏感性は意味探求以外の全ての尺度に負の相関がみられ、美的感受性は人生の意味の二つ下位尺度だけに正の相関が示された（Table 5, Table 6）。

次に、年齢、性別、収入、婚姻状態と子供の有無を統制したうえで、HSP尺度と各尺度の偏相関係数を算出した。その結果、易興奮性・低感覚閾は意味探求以外の全ての尺度に負の相関があり、敏感性は

意味探求には正の相関で、他の因子とは負の相関が示され、美的感受性は全ての因子に正の相関がみられた（Table 7）。

さらに、人生の意味の下位尺度、人生に対する満足度と主観的幸福感尺度を従属変数とし、Step 1の統制変数として社会人口統計学的各要因を、Step 2としてHSP尺度の下位因子を投入した、階層的重回帰分析を行った。その結果、全ての尺度にStep 2の R^2 の変化量は有意であり（ $\Delta R^2 = .06$ to $.34$ ）、美的感受性（ $\beta = .26$ to $.38$ ）と正の関連を示した。意味探求以外の尺度では易興奮性・低感覚閾（ $\beta = -.15$ ）

to -.25) に負の関連があり、意味保有と主観的幸福感尺度ともに敏感性 ($\beta = -.16$ to $-.25$) にも負の関連を示した。そして、美的感受性の標準偏回帰係数

は、社会人口統計学的要因を統制したうえでも、全ての尺度に対して有意であった (Table 8, Table 9)。

Table 7 各尺度の偏相関係数 (N=503)

	1	2	3	4	5	6
1. 易興奮性・低感覚閾						
2. 敏感性	.574 ***					
3. 美的感受性	.262 ***	.217 ***				
4. 意味保有	-.151 **	-.173 ***	.332 ***			
5. 意味探求	.073	.106 *	.265 ***	.212 ***		
6. SWLS	-.168 ***	-.113 *	.231 ***	.463 ***	.202 ***	
7. SHS	-.298 ***	-.317 ***	.269 ***	.460 ***	.121 **	.499 ***

注. 制御変数: 年齢, 性別, 収入, 婚姻状態, 子供の有無
* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 8 人生の意味の尺度に対する階層的重回帰分析 (N=503)

		Step 1			Step 2			
		β	95% CI		β	95% CI		
Step 1	性別	P	-.054	-1.684	.354	-.028	-1.273	.583
		S	-.009	-1.260	1.036	-.004	-1.163	1.073
	年齢	P	.084	-.097	.834	.008	-.391	.459
		S	.087	-.135	.914	.056	-.261	.763
	婚姻状態	P	-.208 *	-5.361	-.418	-.140	-4.185	.290
		S	.029	-2.363	3.205	.059	-1.854	3.540
	子供の有無	P	-.057	-3.133	1.635	-.090	-3.349	.970
		S	.031	-2.265	3.107	-.010	-2.737	2.469
	収入	P	.240 ***	1.082	2.218	.153 ***	.521	1.574
		S	-.006	-.681	.599	-.042	-.932	.336
Step 2	易興奮性・低感覚閾	P			-.151 **		-.209	-.050
		S			-.036		-.127	.064
	敏感性	P			-.160 **		-.215	-.058
		S			.072		-.031	.158
	美的感受性	P			.381 ***		.370	.557
		S			.263 ***		.216	.441
	R^2	P	.172 ***		.330 ***			
		S	.005 <i>ns</i>		.078 ***			
	ΔR^2	P	.164 ***		.319 ***			
		S	-.005 <i>ns</i>		.063 ***			

注. P = 意味保有, S = 意味探求
* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 9 SWLS と SHS 尺度に対する階層的重回帰分析 (N=503)

		Step 1			Step 2			
		β	95% CI		β	95% CI		
Step 1	性別	SWLS	-.031	-1.502	.683	-.003	-1.082	1.001
		SHS	-.029	-1.173	.572	.010	-.658	.858
	年齢	SWLS	.156 **	.234	1.232	.101	-.004	.950
		SHS	.087	-.084	.713	-.004	-.360	.334
	婚姻状態	SWLS	-.166	-5.128	.170	-.112	-4.182	.843
		SHS	-.071	-2.937	1.293	.010	-1.714	1.943
	子供の有無	SWLS	-.012	-2.733	2.379	-.046	-3.071	1.779
		SHS	-.080	-2.918	1.163	-.105	-2.916	.613
	収入	SWLS	.284 ***	1.482	2.700	.212 ***	.968	2.150
		SHS	.255 ***	.960	1.933	.147 ***	.405	1.265
Step 2	易興奮性・低感覚閾	SWLS			-.203 ***		-.276	-.098
		SHS			-.247 ***		-.241	-.111
	敏感性	SWLS			-.051		-.134	.042
		SHS			-.249 ***		-.240	-.112
	美的感受性	SWLS			.278 ***		.258	.467
		SHS			.375 ***		.301	.454
	R^2	SWLS	.173 ***		.265 ***			
		SHS	.115 ***		.347 ***			
	ΔR^2	SWLS	.164 ***		.253 ***			
		SHS	.106 ***		.336 ***			

注. ** $p < .01$, *** $p < .001$

考 察

本研究では、中国人を対象に、中国語版 HSP 尺度を実施し、感覚処理感受性と人生の意味・幸福感の関係を検討した。

まず、中国語版 HSP 尺度の因子構造が、先行研究と類似した 3 因子という結果は、HSP が文化に共通した特徴をもつことを示唆している。SPS は、ヒト以外にも 100 種以上の生物にも見られ、生存戦略として重要であるという (Wolf, Van Doorn, & Weissing, 2008)。Kagan (1994) は、脊椎動物には、外部からの刺激に対して回避行動タイプと探索行動タイプの二つの生存戦略があり、回避行動タイプは内向的で、刺激を慎重に考えて行動し、約 15% から 25% ほど存在すると述べている。Aron (2002) は、生物は異なる生存戦略を使って生き延びてきたと説明している。すなわち、本研究の結果は、HSP が生得的で、文化に共通的な特質であるという理論を支持している。

次に、各年齢層における SPS と各尺度の相関について、性別ごとに考察する。中年期になると、男女共に美的感受性と各尺度の相関が弱くなり、特に男性において美的感受性と意味保有の関係が有意でなくなった。SPS と人生の意味・幸福感、年齢にしたがって、変化すると考えられる。日本の調査 (李, 印刷中) では、40 代以降の中年期に、SPS と各尺度との相関性が変わると報告している。日本においても中国においても、中年期は健康、能力、家庭などの変化や問題を直視しなければならない時期である。中年期は人生の重要な転換期であり、老いと死への不安、希望の喪失、職業的な限界への懸念といった、時間的展望の危機が生じやすい (堀内, 1993)。HSP の人は、HSP でない人に比べて、中年期に人生の辛さをより深刻に感じ、人生の虚無感をより味わうことになると思われる (李, 印刷中)。ポジティブな特徴である美的感受性の影響が弱くなることは、日常生活や人生の意味、幸福感などのポジティブな感情をいっそう感じにくくするだろう。中年期の彼らを支援することで、人生の意味感と幸福感をより感じ、生活のつらさを軽減できる手立てが必要である。

SPS と各尺度の相関を総体的にみると、人口統計学的な変数を統制した場合でも、SPS の影響は有意であった。易興奮性・低感覚閾が高いほど、また感受性が高いほど、人生の意味を感じにくく、幸福度も低いといえる。HSP は、新しい状況に入る前に注

意深くなる傾向を持ち、刺激をはるかに深く、徹底的に処理している。それゆえ、日常生活や人生の意味や幸福を意識するには、エネルギーを消耗しすぎて、ストレスが溜まり、ポジティブな感情を感じにくくなるのだろう。

一方、美的感受性は、人口統計学的な変数を統制したうえでも、人生の意味・幸福感に対して強い予測力をもつことが明らかになった。このことは、美的感受性が高いことで、ポジティブな感情を直接高めることを示唆する。上野・高橋・小塩 (2020) は、SPS の機能は健康や寿命に対して大きな意味を持つ可能性があり、美的感受性を理解することで主観的幸福感を総合的に高めることが可能という。美的感受性の能力をうまく活用することで、精神生活の豊かさが向上し、人生の意味感と幸福感をより感じられるかもしれない。

これらの結果は、先行研究と同様であり (Sobocko & Zelenski, 2015; 高橋, 2016; 上野・高橋・小塩, 2020)、中国においても、SPS の下位因子によって心理的な機能が異なっていた。このことから、HSP は文化に共通した特性だと考えられる。

最後に、本研究の限界とこれからの課題を述べる。1 つ目は、中国で 40 代の対象者が少ないため、日本の調査 (李, 印刷中) で報告された 40 代における HSP の変化が確認できていないこと。2 つ目は、中国語版 HSP 尺度の因子分析の結果は、先行研究 (Smolewska et al., 2006; 高橋, 2016) と類似の 3 因子構造を確認したが、各因子における項目の構成と項目数は、先行研究に一致せず、本研究では「敏感性」という第 2 因子を設定した。これが妥当であるかどうかは、慎重に判断すべきだろう。また、今回の結果により、感覚処理感受性の年齢的な変化は先行研究に不一致なことがあり、慎重に解釈すべきである²⁾。3 つ目に、中国は多民族国家であり、文化も複雑である。中国語版 HSP の特徴を詳しい確認するために、対象者をさらに増やすことが必要であろう。

注

- 1) ここで使った HSP 尺度の日本語の翻訳は HSPS-J19 (高橋, 2016) の内容である。
- 2) 今回の研究の感覚処理感受性と年齢の相関係数については、年齢が高いほど、易興奮性・低感覚閾と感受性は低くなり (易興奮性・低感覚閾: $r = -.105, p = .018$, 感受性: $r = -.170, p < .001$)、美的感受性は高くなっていった ($r = .171, p < .001$)。この結果は、Ueno,

Takahashi, Oshiro (2019) と一致するが、いずれの相関係数も弱く、また日本の調査(李, 印刷中)では確認できなかったため、慎重に保留しておきたい。

引用文献

- Andrew, W. (2019). SWLS the Satisfaction With Life Scale の中国語版. <https://eddiener.com/scales/7>.
- Aron, E. (2002). *The highly sensitive child: Helping our children thrive when the world overwhelms them*. Harmony.
- Aron, E. N., & Aron, A. (1997). Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 345-368.
- Aron, E. N., Aron, A., & Davies, K. M. (2005). Adult shyness: The interaction of temperamental sensitivity and an adverse childhood environment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 181-197.
- Aron, E.N., Aron, A., & Jagiellowicz, J. (2012). Sensory processing sensitivity: A review in the light of the evolution of biological responsivity. *Personality and Social Psychology Review*, 16, 262-282.
- Bamonti, P., Lombardi, S., Duberstein, P. R., King, D. A., & van Orden, K. A. (2016). Spirituality attenuates the association between depression symptom severity and meaning in life. *Aging & Mental Health*, 20, 494-499.
- Benham, G. (2006). The highly sensitive person: Stress and physical symptom reports. *Personality and Individual Differences*, 40, 1433-1440.
- Chien, C. L., Chen, P. L., Chu, P. J., Wu, H. Y., Chen, Y. C., & Hsu, S. C. (2020). The Chinese Version of the Subjective Happiness Scale: Validation and Convergence with Multidimensional Measures. *Journal of Psychoeducational Assessment*, 38, 222-235.
- Erikson, E. H. (1980). *Identity and the life cycle*. W W Norton & Co. (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) (1982) 自我同一性: アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房)
- Evers, A., Rasche, J., & Schabracq, M. J. (2008). High sensory-processing sensitivity at work. *International Journal of Stress management*, 15, 189-198.
- Heisel, M. J., & Flett, G. L. (2016). Does recognition of meaning in life confer resiliency to suicide ideation among community-residing older adults? A longitudinal investigation. *The American Journal of Geriatric Psychiatry*, 24, 455-466.
- 保坂隆 (2018). 敏感すぎる自分の処方箋 ナツメ社.
- 堀内和美 (1993). 中年期女性が報告する自我同一性の変化 教育心理学研究, 41, 11-21.
- Kagan, J. (1994). *Galen's prophecy: Temperament in human nature*. New York: Basic Books.
- Karin S., John M. Z. (2015). Trait sensory-processing sensitivity and subjective well-being: Distinctive associations for different aspects of sensitivity. *Personality and Individual Differences*, 83, 44-49.
- Konrad, S., & Herzberg, P. Y. (2017). Psychometric properties and validation of a german high sensitive person scale (HSPS-G). *European Journal of Psychological Assessment*, 1-15.
- 串崎真志 (2019). 高い感性をもつ人 (Highly Sensitive Person) は物事を深く考える (1): スピリチュアリティとの関連 関西大学人権問題研究室紀要, 78, 1-14.
- 李佳奇 (印刷中). 年齢による感覚処理感受性と人生の意味および幸福感の関係 心理学叢誌 (関西大学大学院心理学研究科)
- Liss, M., Timmel, L., Baxley, K., & Killingsworth, P. (2005). Sensory processing sensitivity and its relation to parental bonding, anxiety, and depression. *Personality and Individual Differences*, 39, 1429-1439.
- 刘思斯・甘怡群 (2010). 生命意义感量表中文版在大学生群体中的信效度 中国心理卫生杂志, 24, 478-482.
- Miao, M., Zheng, L., & Gan, Y. Q. (2017). Meaning in life promotes proactive coping via positive affect: A daily diary study. *Journal of Happiness Studies*, 18, 1683-1696.
- Nell, W. (2014). Exploring the relationship between religious fundamentalism, life satisfaction, and meaning in life. *Journal of Psychology in Africa*, 24, 159-166.
- Orloff, J. (2017). Strategies for empaths and sensitive people. *Energy Magazine*, March/April, 15-18.
- Shek, D. T. L. (1992). Meaning in life and psychological well-being: An empirical study using the Chinese version of the Purpose in Life Questionnaire. *The Journal of Genetic Psychology*, 153, 185-200.
- Smolewska, K. A., McCabe, S. B., & Woody, E. Z. (2006). A psychometric evaluation of the Highly Sensitive Person Scale: The components of sensory-processing sensitivity and their relationship to the BIS/BAS and "Big Five". *Personality and Individual Differences*, 40, 1269-1279.
- Sobocko, K., & Zelenski, J. M. (2015). Trait sensoryprocessing sensitivity and subjective well-being: Distinctive associations for different aspects of

sensitivity. *Personality and Individual Differences*, 83, 44-49.

高橋亜希 (2016). Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19) の作成 感情心理学研究, 23, 68-77.

Ueno, Y., Takahashi, A., & Oshio, A. (2019). Relationship between sensory-processing sensitivity and age in a large cross-sectional Japanese sample. *Heliyon*, 5, e02508.

上野雄己・高橋亜希・小塩真司 (2020). Highly Sensitive Person は主観的幸福感が低いのか? — 感覚処理感受性と人生に対する満足度, 自尊感情との関連から — 感情心理学研究, 27, 104-109.

Wolf, M., Van Doorn, G. S., & Weissing, F. J. (2008). Evolutionary emergence of responsive and unresponsive personalities. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 105, 15825-15830.

Yalçın, İ., & Malkoç, A. (2015). The relationship between meaning in life and subjective well-being: Forgiveness and hope as mediators. *Journal of Happiness Studies*, 16, 915-929.

Yano, K., & Oishi, K. (2018). The relationships among daily exercise, sensory-processing sensitivity, and depressive tendency in Japanese university students. *Personality and Individual Differences*, 127, 49-53.

付記

本研究は研究・投稿に関する協力者の同意を得て実施した。

謝辞

本研究にご参加いただいた参加者のみなさまに感謝申し上げます。

利益相反

著者はいかなる利益相反もないことを表明する。

著者分担

第1著者が本研究を発案し、データ分析、草案作成を行った。第2著者は研究デザインと分析計画に助言を行い、草稿の修正を行った。最終稿は2人で確認した。

著者紹介

李 佳奇 2020年関西大学大学院心理学研究科博士課程前期課程修了, 2020年より関西大学大学院心理研究科博士後期課程に在籍。

串崎真志 関西大学文学部教授。

Correspondence concerning to this article should be addressed to Mr. Jiaqi Li at k235233@kansai-u.ac.jp

要旨

本研究の目的は、中国人を対象者として、中国における高敏感者の現状を確認し、感覚処理感受性と人生の意味・幸福感の関係を明らかにすることであった。その結果、中国での高敏感者は他の文化圏と同様の特徴を持ち、中年期は困難の多い時期と示唆された。年齢、性別、収入、婚姻状態と子供の有無を統制した後で、総合的に結果をみると、易興奮性・低感覚閾と感受性は意味保有および幸福感に関連する尺度と負の相関があり、美的感受性は人生の意味、幸福感と正の相関が認められた。これらの結果から、感覚処理感受性には二面性があり、美的感受性の能力をうまく活用することで、人生の意味感と幸福感より感じられると示唆された。

キーワード：高敏感者、感覚処理感受性、人生の意味、幸福感

